

「イスラーム学・トルコ学」 濱田正美

今回の対談は、平成12年10月19日午後1時半より京都大学人文科学研究所の一室を拝借して行われた。ここに収録するのは対談の前半部分であり、現在濱田が人文科学研究所で主宰している研究班の課題である、中国イスラームの神秘主義文献などをめぐって、話題は展開した。本来ならば前号に掲載の予定であったが、都合で一号遅れることなりお詫びを申し上げる次第である。

上山 あなたのご専門は、東トルキスタンのイスラームとうかがっているのですが、どういうご縁でそういう方向へ関心が向けられたのかという、こういう学問以前の話からお願いできたらと思います。

濱田 私は東洋史の出身ですが、私どもの学生時代の京都大学の東洋史というのは、実は中国史（チャイナプロパー）の先生よりも、辺境の専門家の方のほうがはるかに多かったわけです。

上山 具体的に言うとうどういう先生方がおられたのですか。

濱田 佐藤長先生のチベット史とか、萩原淳平先生のモンゴル史とか。偶然ですけども佐藤先生が清代の新疆の文献を演習や講読で読んでおられて、それが始まりなんです。最初は当然、卒業論文の段階なんかでは漢文でやっていたわけですが、その向こう側に現地のトルコ語のものがある。それを始めますと、つまり、トルコ語の世界というのは別にトルキスタンだけではなくて、新疆はいわばトルコ語の世界の端ですから。

上山 東の端になるんですね。

濱田 イスラームを受け入れたトルコ系の民族というのは、それこそ現在のトルコ共和国からボスニア・ヘルツェゴビナまで広がっているわけです。というようなことで、最初は東の端が出発点なんです。

上山 面積としても、アジアの中でかなり大きい地域を占めるわけですね。

濱田 中央アジアの旧ソ連ですと、今のカザフスタン、キルギスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、アゼルバイジャンというのは、全部トルコ系ということになります。

きっかけはそういうことなんです、始めてみたら、その向こうにずっと広い世界があったということです。

上山 初めは漢文から入られたわけですね。いつごろ

から中国語の枠を越えたんですか。

濱田 羽田明先生がおられまして、羽田先生は既に60年代ぐらいから東トルキスタンのトルコ語のものを少し読むということ始めておられたんです。だから、トルコ語なんかも学部のあるころに少し習ったりはしてありました。

上山 それは別の先生が来られて？

濱田 羽田先生が少し教えておられました。大学院の修士のころは独習をしております、それからパリに留学したということです。

上山 ペルシャ語にまで広げられたのは？

濱田 ペルシャ語は文学部で授業がありますので少し習ったことがあります。

上山 先生は？

濱田 当時は、今桃山学院大学におられる、井本英一先生です。それは授業に1年間ぐらい出ましたけれども、実質的にはペルシャ語もアラビア語も独習です。

上山 読みたいジャンルは大体絞られていたわけですか。

濱田 はい。特に東トルキスタンに限りますと、文献の量自体がそれほど全体として多くはないのです。しかもその中で、圧倒的に聖者伝の類のものが多いわけですが、いろんな事情がありまして、新疆に存在する文献というのは見るのが非常に困難で、ウルムチに随分集められているとはいうんですが、なかなか我々にはアクセスできない。

上山 公立の図書館みたいなものはあるのですか。

濱田 図書館はあります。博物館も集めていますし、いろんな施設が集めているようですが、なかなか直接見せてもらうわけにはいかないような状況です。

上山 大学みたいなところでは。

濱田 大学もありますけれども、大学が持っているか

どうかはちょっとわかりません。私たちが見るようなものは、ヨーロッパに19世紀の末から今世紀の初めに持っていかれたものというのが主になるわけです。それは先生もご承知のように、東トルキスタンはペリオ、スタイン以来の探検で、彼らは同時に実は現代語のもの、砂漠の中から出てきたものではなくて、現地の人が手にしていたようなものも集めて帰っているわけです。スタインはそれほどでもないんですけども、ペリオは持って帰っています。ほかの探検隊もそうです。そういうものをまず読むということから始まったんですが、そういうものの大多数というのは、今申しましたような宗教文献とも言い切れないのですが、歴史文献とも言い切れない。つまり聖者伝のようなたぐいのものが圧倒的に多い。ですから私の研究の方向は材料に規定されたという面もあるわけです。

上山 イスラームの中で、スーフイズムに焦点を絞られたというのは？

濱田 今申し上げたような経緯からです。聖者伝はスーフイズムの自己表現の一つといえると思います。しかし、このごろ日本にもスーフイズムの専門家はたくさんおられるのですけれども、特に東大にイスラーム学科というのができてから、若い人達の間でも随分スーフイズム研究が多いですけれども、そういう神秘主義の神智学というんでしょうか、教理哲学というのか神秘哲学というのか、テオソフィアというようなものとも、私の読んでいるものはちょっと違う。そういう高級なものではないんです(笑)。そういうものの反映はあります。例えば術語を借りてきたりとか。ですから、そっちに関する知識がないともちろん読めないことは読めないんですけれども、テオソフィアを論じているというようなものでもないわけです。

上山 いま、京都大学の人文研の共同研究で中国語の『帰真総義』という文献を読んでいらっしゃるわけですが、これは中国のスーフイズムの関係の文献なわけですね。これは一種の信仰告白というか、「帰真」というのは信仰告白ということですか。

濱田 帰真という言葉は、やはり字義どおり真実に帰る。イスラームの神様は99の名前がありまして、それは神の属性を示すような、属性と名前とは別の範疇のものではありますが、実態は分けられない。その中にハック、真理というのがありまして、ですから真というのはまさに神のことです。中国語では神は真主といいます。ところが面白いことに、中国ムスリムの回族の間で、一般的に帰真というのを意味するかというと、死んだという意味なんです。神のもとに帰ったと。

上山 日本語では、死ぬことを成仏すると言いますね。それと似たようなものでしょうか。

濱田 どうでしょう。

上山 死ぬことによって、生きるために必要な欲望から解放されるということもあるんでしょうね。

濱田 コーランの中には、「我ら皆神の御元へ帰りゆく」という言葉がありまして、私の読んでいるような聖者伝では、聖者が死ぬ寸前のくだりになると、夜、コーランを読んでいると必ずその章句に行き当たるわけです。それでいよいよ死期が来たことを悟ってという話が多いです。

上山 『帰真総義』の総義というのは、要約ということですか。

濱田 そこに出てくるイーマーン・ムジュマルというアラビア語ですと、それは簡略化されたという意味なんです。この間亡くなられた島田虔次先生にお伺いしたら、まあ総という意味をそういうふうな意味で使っても間違いとは言えないだろう、と。つまり、全体を総括したとかという意味で、要約というふうな意味でもいいのではないかとおっしゃっていました。

上山 この本の著者は中国の南方の人ですか。

濱田 確か蘇州の出身の人でした。

上山 これは南京でインドから来たスーフイーに出会って、その言行録みたいなものですか。蘇州のあたりにもそういうふうな回族というのがいたんですか。

濱田 いたと思います。

上山 今もいるんでしょうか。

濱田 ちょっと具体的にはわかりません。回族の場合、よくいうのは大分散・小集中。非常に広い地域に広がっている。けれども実際の住み方というのはある地域、ある地区に集中して住んでいる。

上山 これは民族的というか、そういうものとかかわりはあるんですか、回族なる集団は。

濱田 普通言われているのは、コアになっているのは、南海のほうですと随分早く、それこそ桑原隲蔵先生の『蒲寿庚の事蹟』で有名になったわけですが、唐の時代からイスラーム教徒が泉州なんかには来ているわけです。西北のほうになるとそれはたぶんモンゴル時代にもっと大量に陸路、西のほうから入ってくる。そういうふうにして移住してきた人たちがコアになっていることは間違いない。それが特に漢族の女性をめとるか、あるいは養子をするとかという形で、共同体が大きくなっていったと言われてます。

上山 今の東トルキスタンあたりはかなり回族が。

濱田 東トルキスタンの、つまり新疆の回族というのは、清代になってから今度は逆に本土からそちらへ行

くわけです。

上山 本土というと？

濱田 中国内地から。つまり、新疆は乾隆帝が征服するまでは全く中華の文明の及んでいない地域ですから。時代をさかのぼれば唐代には漢人の植民地があるわけですけれども、その当時の高昌とかです。時代が下ってくると、これは今度は逆に全部イスラーム化されてしまった。そこへまた清代になって、内地から移住してはいけないという政策を清朝はとっていたんですけれども、それをかいくぐって行く。特に19世紀の後半に大反乱がありまして、それを鎮圧した後はもっと大規模に移住していったようです。

上山 それでは漢民族ですか。

濱田 つまり、言語も普通の宗教的な事柄を除く生活習慣も、一応周りの漢族と区別がありません。

上山 そこへ布教師みたいな者が、西からやって来ているわけですか。

濱田 『帰真総義』に出てくるアーシュクという人物だけではなくて、例えばカーディリーヤという教団があって、その中国での教祖も、明末ぐらいに四川を通して、そして今の甘肅の蘭州あたりにやってくる。また同じころに、今度はカシュガルから甘肅のあたりに布教にやって来るといったのがあります。

上山 それはジェスイットみたいにどっかから派遣するという形ですか？

濱田 どうもそうではなくて、個人的にやって来たようです。

上山 今の『帰真総義』に関する論文を書かれていますが、そこで問題にされているのは、中国のスーフィーの実態だけではなくて、そのスーフィーというのが、例えば『帰真総義』みたいに、ものを書いたりするときに、かなり高度な中国的な教養というものを織りまぜながら展開していく。しかもその注釈などが、一遍中国化され漢文化されたものをもとにして注釈を展開する。ここに書いておられるのは明代になるんでしょうか。

濱田 明末です。実際にその本が編まれたのは清初になるわけです。

上山 そうすると、中国の知識層の中では、例えば新儒学としての朱子学みたいなものがかなり浸透していますね。もう一つは、臨濟禅のようなものが相当。『朱子語類』なんかを見ますと、朱子などは臨濟禅の流行に危機感をもっていますね。そうすると知識層の中では、朱子学や臨濟禅、そういうふうなものを通して来た術語が、漢文で書くスーフィーの文章の中に入ってくるわけですね。その点に触れていらっしゃるわけ

すけれども、そういう場合にいろいろ問題が起こると思いますが、今までそれをめぐって問題提起が日本の学会なり中国の学会などでも、ある程度はなされていると思うんですが、どうなんですか。

濱田 少し議論はあるようです。例えば、非常に早くから日本では回儒という言葉が使われるようになって。

上山 どのような字ですか？

濱田 回の儒者ですね。それが便利なものですから、今の人たちも使うようなんですが。

上山 それは江戸時代ですか。

濱田 1925年に出た白鳥庫吉先生の記念論文集の中に、桑田六郎さんが「明末清初の回儒」という論文を書いておられますが、多分これが初出だと思います。中国で稀に回儒ということばを使うときは、ムスリム出身で儒者になった者の意味で用いられているようです。回よりも儒の方に重点がおかれています。ただ特に中国の研究者の中でも、一部の人はイスラームが非常に中国化したという主張はずっとされているようです。その論文の中でも引きまされたけれども、『帰真総義』という文献は、中国化する段階を非常によくあらわしているということは今までも言われているんですが、しかし、具体的にどこを取ってどうだというふうにはあまり……。ただ、これは非常に微妙な問題でして、例えば馬聯元という、これは清末に近い時代の人だったと思いますが、有名な劉智という清代のイスラームの学者の『天方性理』という本をアラビア語に訳しているんです。アラビア語訳をして、それにまた自分でアラビア語で注釈を書いている。短いものですが、そういう書物がありまして、それに関する研究を最近、松本耿郎さんという方が発表なさったんですが、それを見ますと、アラビア語の重要なタームと、漢字の間に一対一の対応が認められる。例えば玄という字とガイブというアラビア語の間にそうした関係があると云うわけです。だから中国語の玄として理解するよりは、むしろガイブというイスラームのほうの観念で理解したほうが、そういうふうに対応をしておられるわけではないですけれども、つまり、コンテキストでやればそういうふうに対応は成立しているということを示すことができた研究が出ました。

上山 今のガイブというのは、強いて言うとうどういう意味になりますか？

濱田 不可視のことです。

上山 玄にちょっと似ていますね。

濱田 そうしますと、それは翻訳なのか、それとも漢字の意味をもって理解したほうがいいのか。その漢字は1対1対応のアラビア語のある観念をあらわしてい

るというふうに思ったほうがいいのか。その問題が非常に微妙な問題として出てくると思います。それはそれこそ今、人文研の研究会で皆さんと一緒に考えていただくと思っていることなんです。

上山 漢文で書いていて、アラビア語かペルシャ語が知りませんが横に小さくしるしを書いたものがあるんですか。そのところは音読みにするようにとか。

濱田 そう。音読みにするようにと書いてある(笑)。

上山 これはやはり覚えさせようとしたわけですか。もとの聖なる言葉を。

濱田 どうでしょう。

上山 それとも韻文が何かに限ってそうなんですか。

濱田 いやいや、そうじゃなくて、要するに術語、ほとんど出てくるのはテクニカルタームです。

上山 呪文のようなものはないんですか。

濱田 真言のマントラのようなものはありません。意味で解釈するわけですから。本文のイー・マーン・ムジュマルというのは、これはそのまま文章を漢字で書き写しております。

上山 一応、音写しているわけですね。

濱田 例えばここに、経文第一句と書きまして、阿滿禿賓略希克謨乎密という漢文で書いていますが、これをアラビア語に復元すると、アー・マントウ・ピッラーヒ・カマー・フワということになると思うんです。

上山 これはずっとあちらこちらに出るわけですね。「『帰真総義』初探」というご論文で、この中で四つほど問題点を絞っていらっしゃるわけですが、まず、先生はインド人のスーフィーですね。その人はアー・シュクというんですか。これが今の『帰真総義』を書いた著者を含めて弟子たちに話をするわけですね。そういうときに一体、どうやって意思を伝えたのか。これは直ちに疑問に思ったことなんでしょう。

濱田 凡例のところに確か、西師の講解は梵語、華語互いに発明す。予はただ儒文を加えて、これを訳潤す。と書かれています。ですからたぶん梵語と言っているのは、インドのイスラーム教徒のことを考えるとペルシャ語だろうと思います。

上山 インドのどの辺ですか？

濱田 どの辺の出身かはわかりません。

上山 普及しているのは全体ですか。

濱田 ハイダラバードとかの中央部もありますし。必ずしも今のパキスタンの領域に限ったわけではないと思います。

上山 そのころは、それが通用語になっていたわけですか。

濱田 書くものはみんなペルシャ語でやっています。

ですからペルシャ語だろうと思います。そして、中国語。たぶん片言の中国語を話して、それでやっていたらだろうと思います。

上山 アラビア語も入るわけですか。

濱田 アラビア語はたぶん術語としてしか入ってきていないんじゃないですか。ただ経文とっているのはアラビア語です。

上山 そこらにも両方交じっているんですか。

濱田 単語のレベルでは両方交じっています。

上山 術語には？

濱田 しかし、スーフイズムの用語というのは概ねみんなアラビア語。もとはアラビア語ですから、アラビア語からペルシャ語に借用され、その借用された形がさらに漢字に写されるということだと思います。

上山 非常に初歩的なことで申しわけないけれども、スーフイズムというのは割と中央アジアから西では支配的だったんですか。

濱田 そう思います。これは杉山正明さんのご専門ですけれども、モンゴルがやって来て、そしてアフリカを除くイスラーム世界のほとんど全部を征服してしまうわけです。

上山 あれは何世紀ごろだったんですか。

濱田 13世紀の半ばまでです。そのときに、それまで存在していたイスラームの国家というのは多かれ少なかれある意味で正統的で、その正統的なイスラームに対する支えになっていたと思われるんですが、それを全部つぶしてしまいましたから。そうすると、神秘主義者がイスラーム社会を代表するようなどころへ浮き上がってくるんです。

上山 それ以前は少数派だったわけですか。

濱田 少なくとも正統派ではない。それがイスラーム社会を代表するような立場に浮き上がってきて、そして、それまでのイスラームの拡大というのはジハード(聖戦)によるわけですが、ところがモンゴルの支配下では戦争しないで、今言ったスーフィーたちがどんどんモンゴル支配下の地域どこへでも行くわけです。例をあげますと、カラバルガスン、もとのカラコルムにひとつだけモンゴル時代のペルシャ語の碑文というのが残ってしまっていて、それは後にチベット仏教の宝珠の印を上刻まれているんですけども(笑)。ところが下は読める部分もある。私は拓本を手に入れた人が日本でその研究を発表されたのですが、スーフィーの道場がありまして、ちょうど禅宗の僧堂みたいところで、ペルシャ語でハンカーというんですが、それを建てたという記事のようなんです。少なくともカラ

コラムにまでそれはあったことは確かなんです。モンゴル時代に広がったことは確かで、中国本土にもそのときに入ってきた。ジュバイニーの歴史書なんかにも、中国の南のほうまで布教に行ったスーフィーの話というのが出てきます。

しかも、中国以外のモンゴルの支配者というのは、キプチャク汗国でもイル汗国でも、あるいは私がやっているようなチャガタイ汗国でも、ほとんど、みんなスーフィーの影響のもとにイスラームに改宗する。ですからスーフィズムというのはそもそもそこら辺から既に政治と結びついている面も持っている。

上山 それは幾つかの派に分かれたりしていがみ合うことはなかったんですか。

濱田 スーフィズム自体は幾つもタリーカというちょうど仏教の宗派と同じような宗派がありまして、極端な場合には殺し合いをすとか、やっぱりそういう宗派争いというか、権力争いをします。それはやはり影響力、特に政治権力者に対する影響力をめぐって争いが生じるということです。

上山 今のイスラームでは、スーフィズムというのはかなり比重は高いんですか。

濱田 二つ言えると思います。一つは、先生もご承知のような最近のイスラーム復興主義とか、あるいは原理主義的な動きというのは、これはスーフィズムを逸脱であるというので非難するわけです。ただし、19世紀まではスーフィズムと正統的なムスリムというのは区別がつかないような状態になっていたというふうに普通いわれています。最初の改革派あるいは欧化主義者というか、そういうものもスーフィズムの中から出てきた。ところが、今の復興主義というか原理主義というか、それはスーフィズムを完全に切るという形です。ただもう一方では、スーフィズムは、民衆的なバックグラウンドというのは持ち続けているという面と、もう一つ現代の現象として興味深いのは、神への愛とか神の愛とかいう個人的な契機が非常にスーフィズムは大きいですから、我々にも理解しやすいし、ヨーロッパ人にも理解しやすいといえます。スーフィズムの研究者がたくさんいるというのもそういう背景があると思うんです。幾つかの教団はイギリスとかアメリカで、フランスでも少しあるかもしれませんが、結構成功しているんです。つまり、ヨーロッパ人の信者を獲得しつつある。

上山 あなたの『『帰真総義』初探』という論考のしまいのほうに、『帰真総義』を含めて漢文で書かれたイスラームの文献の中に、「愛」という言葉が出てこない。それから「教団」という言葉が出てこないと言

かれていますね。今、愛の話が出たので、そのあたりは難しい問題だと思いますけれども、愛というのは、ヨーロッパ人は割となじみがあるわけですね。中国の場合出にくいという。

濱田 そういう事情は多分あると思うのですが。例えばアガペーを一体どうやって訳すかという。私もよく知りませんが、仏教なんかでは愛はやはり愛欲のほう。

上山 そうなりますね。

濱田 だから愛という言葉は使わないにしても、何か別のそういう概念をあらわすものがあるかどうかということなんです。おそらくあるんだろうと思いますが、まだ私自身は見つけれられておりません。例えば、それこそジェズイットが日本へやって来たときに、神の愛というのを神の御大切と言っていた（笑）というようなことが中国のイスラームで無かったかどうか

上山 それとおもしろいと思ったのは、あなたの論文の中に墓を探す話がありましたでしょう。聖者の墓を見つける話。あれがいっぱいあるんですね、東トルキスタンあたりにも。これはやっぱり現実にどんどん西からやってきたスーフィーの師匠みたいなものとかかわる場合があるんですか。

濱田 それもありますけれども。

上山 それもあるだけで、必ずしもそうではない？

濱田 ル・コックという、最初の探検家と言ったら悪いですが有名ですが、彼が新疆で聞いた話。しかし、これは聞いたと言っているだけけれども、ひょっとしたら彼がでっち上げた話かもしれない。あまりおもしろすぎるのですが。それは、あるところにスーフィーの弟子がいて、今から旅に出かけて修行に行くからといって師匠から口バをもらう。その口バに乗っていったところ、途中で口バが倒れて死んでしまった。それを道の傍らに埋めてオイオイ泣いていたら、大金持ちが通りかかって、これほど泣かれているんだから偉い人が死んだに違いないといって、立派なお宮とか廟を建ててくれるんです。そこで彼は成功して、信者もふえて大金持ちになる。そこへ自分の先生が旅をしてやって来て、ところでここに埋められているのはだれだ、と。弟子のほうで、実は先生からいただいた口バですと。ところで先生が祀っておられたあれはだれですかと言ったら、おまえの口バの母だって（笑）。

上山 よくできている（笑）。

濱田 あまりよくでき過ぎているので、それぐらい墓はたくさんあるということです。

上山 その廟を何と言いましたか。

濱田 普通はマザールと言います。

上山 そこはやはり人が集まる場所になるんですか。

濱田 もともとマザールというのは行くべき場所という意味ですから。

上山 そういう一種のホーリーな場所ですね。あなたはその間に幾つか出会ってこれましたか。非常にたくさんあるんですか。

濱田 非常にたくさんあります。

上山 もともと出発点は聖者の墓ですか。

濱田 こういうことを言うと信仰の立場にある人は怒られると思うんですけども、イスラーム信仰の中に、それ以前の信仰が生き残るとしたら、聖者崇拜という形をかるうじて取るほかないわけです。キリスト教でもどこでもいっぱいあるわけですが、巨石信仰とか、巨木信仰とか、特にマザールといわれるものがある場所は泉が多いんです。

上山 キリスト教でもそうですね。

濱田 聖者崇拜自体はさっき申し上げたような厳密なイスラームでは、異端ではないけれども逸脱だと。だからワッハーブ派、今サウジアラビアを支配していますが、彼らは聖者の墓を全部破壊しました。

上山 それは正統派ですか。

濱田 というか、厳格派ですね。墓を全部破壊して、一時彼らが非常に強かったときに、ムハンマドの墓まで壊したといううわさが流れてイスラーム世界のほかの人たちが恐慌をきたしたということがありました。

上山 考え方としては親鸞なんかに似てますね。

濱田 そのワッハービーヤが支配的な地域を別とすれば、ほとんどすべてのイスラーム世界に聖者崇拜という形態はあるわけです。

上山 スーフィーがそれになじみやすいんですか。

濱田 なじみやすいと思います。つまり、スーフィーというのは神と合一を遂げた人ですから。聖者というのは神の恩寵にあずかっているわけですから、そういう聖者をワリーというんです。ワリーというのはもとは近い者の意味ですから、つまり保護者も被保護者もともにワリーです。神の友達だから、特に神様の保護は厚いわけです。イスラームの神学では、厳密にいうと最も有力であるといわれるアシュアリー派では、神様は一瞬ごとに世界をつくっているわけです。

上山 何か書いてありましたね。仏教の俱舎論にそっくりだなと(笑)。

濱田 本当にそうです。一瞬ごとにつくる。粒子みたいにですね。時間の連続がない。だから因果律は成立しない。だけど因果律が一見成立しているように見えるのは、神様が自分の習慣に従っているからで、

神様が時々友からの要請によってその習慣を破る。それが習慣を破る者というので、すなわち奇跡のこと。ですから神の友、聖者に頼むのが奇跡にあずかるのは一番早い。

それともう一つ、奇跡にあずかりたいということと関連はしますが、聖者のお墓の周りには普通の人のお墓も非常にたくさんあるわけです。それは最後の審判のときに聖者は天国に行くことが確かですから、くっついていくわけです(笑)。

上山 なるほど。僕はこの墓の話を見ながら、高野山を連想したんです。

濱田 それと、靈魂観に関連するのですが、聖者の墓で骨、骨という話が出てまいりますでしょう。聖者の遺体があったとか、骨があったとか。靈魂というようなものがどこかへ飛んでいってしまうのではなく骨にくっついていくというのは、よくはわかりませんが、あるいはイスラームのほうのものではなくて、ひょっとしたらもっと東方の起源のものかもしれない。

上山 仏舎利信仰？

濱田 聖者墓の崇拜の起源地域だと思われるようなところ、例えばホラーサーンなどは仏教がかつて流布した地域が含まれるわけです。ちょっとほら話ですけども、実はそこまでいけるんじゃないかなと。

上山 この前台風で国宝の五重の塔が倒れた室生寺なんか、舎利信仰で有名ですね。

濱田 靈魂は靈魂ですからどこにいてもいいはずのものなんですけれども、どうして骨に靈魂がついているというふうに考えられたのか。確かにその要素を抜くと聖者廟の崇拜というのは成り立たないということなんです。そこへ行ってお参りをするわけですから。

上山 仏舎利みたいに細かく砕いてはないわけですね。

濱田 カトリックで言うような、トランスラーチオとかエレヴァーチオという、そういう習慣はあまりないように思います。そうだと簡単にバラバラにして分骨すれば墓を造るのは簡単で、あらためて発見する必要はないわけですけども(笑)。

上山 空海が東寺の管理を任されたことがありますね。あそこの講堂に二十一体の仏像の立体曼陀羅をつくりましたね。あの仏像の修理がつい最近おこなわれて、そのときに赤外線が何かで頭の中を見たら、言われていたとおり舎利が入っていたというんです。仏舎利信仰というのは仏教ではずっとあるわけですね。ところがイスラームでは教理的には？

濱田 正統派の教理ではまずいです(笑)。

上山 しかし、イスラーム全体の中では正統派というのは少数派なんですね。

濱田 とも言えないですね。実は、私のやっていることをどのように説明したら良いかと考えていたのですが、要するは19世紀くらいまでは、イスラームのあり方は実に様々であった。その様々な要素につきあっているうちに私の研究もテンデンバラバラ、まとまりのないものになっていると申し上げたら良いのではないかと思いつきました(笑)。つまり、そういうバラバラなあり方というのは一方ではずっとあり続けていると思いますが、現在では、再イスラーム化という現象が今は非常に強く表れている。

上山 それはいつごろから？

濱田 非常に顕著になったのは1960年代、70年代以降のことだと思います。

上山 それはどういうことですか。

濱田 一つには、非常に皮肉な話ですけれども、例えば前近代というか現代以前のムスリムだった人たちというのは、アラブ人を別にすれば、考えてみたら教養のある人は別として、コーランに何が書いてあるかという事は知らないわけです。読めないわけです。コーランの翻訳というのは存在しないわけですから。例えばカザフスタンなんかだと、カザフ語のコーランの訳は、信仰の立場からいうと訳は認められませんから注釈ということになるわけですけれども、つい最近刊行されました。それまで、カザフ人はカザフ語でコーランを読むことはなかったのです。

上山 ルターなんかのあれが今起こりつつある。

濱田 そういう感じです。それと同時に、説教なんかでも、識字の人がふえてきたからパンフレットにして出回る。有名な指導者の説教や何かがカセットで売り出されるという状況があって、何をもってまじめというかは別として、厳格なイスラームに触れる機会が一挙に増大したわけです。

上山 一般の人にコーランが読めるわけですね。

濱田 読めるようになったということです。つまり、自分の言葉でコーランが読めるようになった。

上山 民衆の教育水準が上がっているということもある。

濱田 そうすると、あるレベルのところでは文字を通して、あるいは現代のメディアを通して布教活動を行うことができるようになった。だからエジプトとかの現状というのは、まさにそういう事情を背景にしていると思いますが、あるいはトルコでも。

上山 トルコは早かったんですか。

濱田 トルコの場合は、ヨーロッパ人になろうというのが一貫してあって、その挫折という形でイスラームへの回帰というのが起こっていると思います。

上山 コーランのトルコ語への翻訳というのはかなり早く行われているんですか。

濱田 比較的早いほうです。トルコ語で説明されるようになるのは。

上山 それじゃあ今はイスラームが新しく脱皮しかけているわけですね。

(次号に続く)

